

# 歐陽修と邵雍

——地上の仙界をめぐる——

森 博 行

北宋の邵雍（一〇一一—一〇七七）は、悟りを開いた民間の哲学者であり、かれとまったく同時代の歐陽修（一〇〇七—一〇七二）は、政界・文学界の大立物である。この対照的ともいべき人生を送った二人の間に、直接的な交流があつた形跡はない。しかし、邵雍は文学作品を通じて、歐陽修の影響をうけていたのではないか。本稿はこの点を明らかにすることが目的である。今回のおもな資料は、歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」（『歐陽文忠公文集』巻一百二十九『筆説』所収）と、「西湖念語」および「採桑子」（巻一百三十二）である。なお、歐陽修の経歴については、劉徳清著 郭預衡審訂『歐陽修伝』（哈尔滨出版社 一九九五年）がたいへん役に立った。

## 一 地上の仙界

1 人類の歴史、あるいは人の一生は、ある意味では、幸福をさがしもとめて、牛のようにノロノロとさまよい歩く、

苦しい道程であるといつていいかも知れない。中国の場合、幸福は、神仙（仙人）あるいは仙郷（仙界）なる言葉によつて象徴的に表現され、神仙あるいは仙郷の探求は、中国の古典詩におけるひとつの重要なテーマであった。わたしの調査した範囲でいえば、唐代（六一八―九〇七）以前の知識人にとつて、仙界は、この地上とまったく隔絶した別天地であつて、ある特別な僥倖ともいふべき場合を除けば、到達不可能な世界であつた。その現れの一つが、陶淵明（三六五―四二七）の「桃花源詩并びに記」をモデルにして作られた、後世の詩人たちの作品群である。拙稿「陶淵明『桃花源并記』その後」<sup>(1)</sup>参照。ところが時代が宋代（九六〇―一二七九）に入つて百年ほどすぎると、事情は一変する。拙稿「邵雍と太平」<sup>(2)</sup>の注釈①において、曾鞏（一〇一九―一〇八三）の「西湖二首・其の二」（南豊先生元豊類藁）巻七）を引用したうえで、「仙界はこの地上にあるという思想が、この時代の知識人の間で共通認識としてあつた」と記した。ここに再度、「西湖二首・其の二」を引用すると、つぎのとおりである。

湖面平隨葦岸長　湖面　平隨にして　葦岸長し

碧天垂影入清光　碧天　影を垂れ　清光に入る

一川風露荷花曉　一川　風露　荷花の暁

六月蓬瀛燕坐涼　六月　蓬瀛　燕坐涼し

滄海桴浮成曠蕩　滄海に桴の浮かぶは　曠蕩を成し

明河槎上更微茫　明河に槎の上るは　更に微茫たり

何須辛苦求人外　何ぞ辛苦して人外に求むるを須いんや

自有仙郷在水郷　自のずから仙郷の水郷に在る有り

詩題の「西湖」は、齊州の大明湖。第一句の「平隨」の「隨」は、「稽」に同じ。第二句の「影」は、太陽のひかり（西湖・其の二）の尾聯に「行きて平橋に到り　初めて日を見、滿川の風露　紫荷香し」と詠ぜられている。其の一・其の二

ともに、太陽が顔を出しはじめたときの光景である。「清光」は、湖面のひかり。第三句の「一川」は、一面の意（詩詞曲語辭匯釈」巻六「二川」。第四句の「蓬瀛」は、蓬萊と瀛州、渤海にある仙人が住むという島。ここは大明湖のなかにある島をこう呼んだ。第八句の「自のずから仙郷の水郷に在る有り」に呼応する。第五句は、孔子が中国に道が行われないことを嘆いて、「桴に乗りて海に浮かばん」といった故事。『論語』第五「公冶長」篇。第六句の「明河」は、天の川。漢の張騫が武帝の命を受け、槎に乗って黄河の源を求めて黄河をさかのぼっていったところ、天の川にたどり着いた話。宋懐「荆楚歲時記」「七月」。曾鞏は、これらふたつの話は「曠蕩」、つまりほら話であり（孔子はたわむれていった）、「微茫」、つまり漠としてつかみどころのない話であって、このように「曠蕩」で「微茫」なものを、何も「辛苦して人外に求」める必要はなく、「自のずから仙郷の水郷に在る有り」、つまり仙郷はこの地上にあるというのである。なお、右の詩中の「人外」を「天外」に作る文献がある。陳杏珍 晁繼周 点校『曾鞏集 上冊』一〇二頁（中国古典文学基本叢書 中華書局 一九八四年）。

地上の仙界といえ、すぐに連想されるのが、陶淵明の桃の花さくユートピア「桃花源の記」であるが、王安石（一〇二一―一〇八六）に「桃源行」<sup>(5)</sup>（臨川先生文集」巻四）と題する、桃花源をテーマにうたった詩があり、そのなかで「児孫生まれ長じて世と隔たり、父子有りとも君臣無し」とうたわれているように、王安石は桃花源の住人を、秦代にここに逃げ込んできた人々の子孫ととらえている<sup>(6)</sup>。けれども、彼らが生きている世界は、詩題からいって、やはりこの地上とかけ離れた別世界であることに変わりはない。蘇軾（一〇三六―一一〇一）が「和陶桃花源」詩（清・王文誥輯註『蘇軾詩集』巻四十 紹聖三年（一〇九六）の作）と題する詩の序文の一節において、「世 桃源の事を伝う、多く其の実に過ぐ。淵明の記すところを考うるに、止<sup>た</sup>だ言う 先世 秦の乱を避けて此に來たる、と。則ち漁人の見る所、是れ其の子孫たるに似たり、秦人の死せざる者に非ざるなり。又た云う 鶏を殺して食を作る、と。豈に仙にして殺す者有らんや」とかれの見解を記し、更に「桃花源」と同じような世界がほかにも存在すると指

摘した後、しかし、そこへの「道は極めて険遠」と述べ、「予れ潁水に在り、夢に一官府に至る。人物 俗間と異なる無し、而かも山川清遠にして樂しむに足る者有り」と、述べているとおりである。蘇軾の「和陶桃花源」詩も、王安石の作品とおなじ流れのうえにある。更にまた、「北宋のはじめを代表する詩人」梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）に、「武陵行」〔宛陵先生集〕卷三と題する、桃花源をテーマに詠じた詩の場合に至っては、「厖眉鬢髻の人、倏ち遇いて、心顔喜ぶ」、「柎を鼓して僊（仙に同じ）源を出ずれば、繁英猶お邂逅たり」という句があつて、「厖眉（もじやもじやの眉毛）で鬢髻（たぶさを結んで垂らした髪）の人」は我々が中国の絵画によくみかける長い杖をついて立つてゐる老仙人を彷彿させるものであり、第三十九句に『僊（仙に同じ）源』とある以上、梅堯臣が考えていた桃花源の住人が、仙人であることは明白である<sup>(9)</sup>。梅堯臣の場合には、「桃花源」をまだ仙人の世界という認識から一步も外に出ていなかった。

ところで冒頭に引用した曾鞏の詩は、拙稿「邵雍と太平」の注釈①においてすでに述べたとおり、熙寧五年（一二〇七）の季夏六月に作られたが、この時代にこのような思想が広がるうえで、大きな役割を果たした人物は、じつは歐陽修（一〇〇七—一〇七二）であつて、邵雍もかれの思想を確立するうえで、歐陽修の影響を受けていたのではないか。

## 二 邵雍「撃壤吟」および「三城の旧友衛比部に寄す」ふたつの詩

邵雍（字は堯夫）に「撃壤吟」〔伊川撃壤集〕卷八と題する、次のような詩がある。

人言別有洞中仙 人は言う 別に洞中の仙有り

洞裏神仙恐妄傳 洞裏の神仙 恐らく妄伝ならん

若俊靈丹須九轉 若し靈丹の須らく九転すべきを俟たんには

必求朱頂更千年 必ず朱頂の更に千年なるを求めん

長年國裏花千樹 長年國裏 花は千樹

安樂窩中樂滿懸 安樂窩中 樂は滿ち懸かる

有樂有花仍有酒 樂有り花有り 仍お酒有り

却疑身是洞中仙 却つて疑う 身は是れ洞中の仙なるかと

「別に」とはこの世界とは別の場所にといい意味。「神仙」は仙人。「靈丹」は仙藥。仙藥には一度から九度、つまり「九転」まで精鍊する方法があり、「九転の丹はこれを服すれば、三日にて仙を得」（「抱朴子」卷四「金丹」）。「朱頂」は千年の寿命をもつといわれる鶴。「朱頂 鶴一隻、師と雲間に騎す」（白居易「微之と同じく郭虚舟鍊師に贈別五十韻」）「白氏長慶集」卷五十二。「長年國」は國都として長い歴史をもつ洛陽。「長年」つまり長寿には、仙界の意味をふくませた。「花」は牡丹。当時、洛陽では単に花といえば牡丹を指した。歐陽修「洛陽牡丹記」（卷七十二。景祐元年一〇三四の作）。邵雍は「添色紅」という名の牡丹を所有していた（東軒の前の添色牡丹一株 開くこと二十四枝、兩絶を成し、諸公に呈す）卷十および「戯れに王郎中に呈す」卷十一の「自注」。この「添色紅」は、「洛陽牡丹記」に「始めて開きし時は白く、日を経て漸く紅く、其の落つるに至りては、乃ち深紅に類す。此れ造化の尤も巧なる者」と記されている。邵雍自慢の牡丹であった。「安樂窩」は邵雍が住んでいた家の号。「樂有り」の「樂」は樂ではなくて樂、つまり音楽である（明・呉瀚「宋邵康節先生伊川擊壤集」卷之一の「摘註」に「岳」と注記する）。「滿ち懸かる」は、滿ちわたるといふ意味であろうか。あるいは「樂懸」（樂器をかける設備）からの連想で「懸に滿つ」と訓誦するのであろうか。いずれにしても前句の「千樹」から判断して、多量を意味するであろう。「洛陽牡丹記」に、牡丹の花が咲いている時節には「往々にして古寺廢宅の池台ある処において市井を為し、帳帘を張り、笙歌の聲 相い聞こゆ」

と記されている。「安樂箇中 樂は満ち懸かる」は、市井のにぎやかな樂の音が、邵雍の耳にも達した、ということであろうか。ところで右の詩に対して、「このときの邵雍には、地上を仙界とする思想があつた」と、わたしは述べた。この詩が作られたのは、「西湖」二首・其の二」と同じく仁宗の熙寧五年（一〇七二）の、詩の配列から考えて、おそらく春（何月かは不明）である。かれには更にまた「心耳吟」（卷十二）と題する、熙寧七年（一〇七四）、六十四歳のときに作られた、つぎのような詩がある。

意亦心所至 意は亦た心の至る所

言須耳所聞 言は須らく耳の聞く所なるべし

誰云天地外 誰か云う 天地の外

別有好乾坤 別に好き乾坤有り

「別に好き乾坤有り」とは、「心」「意（思）」と「耳」「言（語）」という人間の感官や感覚を越えたところ、つまり「天地の外」にあるという仙界を指していった。邵雍はそういうものの存在を否定するのである。かれにとつてはあくまでも、「道は人に遠からず、乾坤は只だ身に在り」（「乾坤吟」二首・其の二「卷十七」）である。なお、「心耳吟」とまつたく同じ形式・内容の詩が、先ほどの「乾坤吟」二首・其の二」として収録されており、「心耳吟」は邵雍お気に入りの詩であつたと思われる。

ところで、わたしは邵雍の詩に興味を抱くにいたつたのは、かれの詩におびただしく現れる「芳草」という言葉に対する関心からであり、邵雍の「擊壤吟」に注目したのは、かれの熙寧五年（一〇七二、六十二歳）の、やはり詩の配列から考えて秋（何月かは不明）に作られた「三城の旧友衛比部に寄す」（卷九。「三城」はいわゆる河陽三城。現在の河南省孟県。衛比部は未詳。）と題する、二首連作の第二番目の詩との関連からである。詩は次のようなものである。

景好身還健 景は好く 身も還た健かなり

天晴路又乾 天は晴れ 路も又た乾く

小車芳草軟 小車 芳草は軟かに

處處是晴歡 処処 是れ清歡なり

この詩において、『小車 芳草軟かく、処処 是れ清歡なり』とうたったとき、邵雍は地上の仙界を心に描いていたのではないか、『芳草』は地上の仙界をいろどる光景としてとらえられている、『地上の仙界と『芳草』、これは『芳草』史上、画期的なことである』、『このことは邵雍が思想遍歴において質的に高い次元、一種の悟りの境地に到達したことを意味するのではあるまいか』（『夕日と芳草』一八七頁）などと、コメントした。かさねていえば、熙寧五年（一〇七二）秋、邵雍六十二歳のときである。ところで『芳草』とか『悟りの境地』とかはともかく、地上の仙界、これは邵雍が独自に到達した思想であろうか。

### 三 欧陽修「採桑子十首」制作時期

欧陽修（一〇〇七―一〇七二）は、邵雍（一〇一一―一〇七七）より四歳年上であり、五年早くなくなった。この欧陽修に第一句に必ず「西湖好」（西湖好し）という表現をふくむ、十首連作の「採桑子」（卷二百三十一）と題する詞（詩余）がある（『採桑子』と題する作品は、全部で十三首ある）。「西湖」は、潁州（現在の安徽省阜陽県）にある湖であって、欧陽修は、皇祐元年（一〇四九、四十三歳）正月丙午（十三日）から、同年四月丙戌（二十四日）に礼部郎中の役職に転じるまでの間、潁州の知事を勤めたことがあり、また熙寧四年（一〇七二、六十五歳）七月、退職して潁州にもどり、翌年の閏七月庚午（二十三日）に潁州の私邸でなくなっている。胡柯『廬陵歐陽文忠公年譜』（『歐陽文忠公文集』所収）。潁州は欧陽修が早くに隱遁所ときめていたお気に入りの地であった。かれは「皇祐元年春、予れ広陵自ら潁に

来たらんことを請うを得たり。其の民は淳にして訟は簡に、而うして物産は美、土は厚くして水は甘く、而うして風氣は和なるを愛す。時において慨然として已に終焉の意有るなり」(卷四十四「思穎詩後序」)と述べている。

ここでもう一度、邵雍の「三城の旧友衛比部に寄す」詩が熙寧五年(一〇七二)の秋に、また曾鞏の「西湖二首」其の二」が熙寧五年の季夏六月に作られたことを確認したうえで、歐陽修の「採桑子十首」の制作時期について述べておきたい。

「採桑子十首」は、必ずしも同時の作とはいえないようだが、退職して潁州にいたとき、最終的に全体にわたって手を加え、整理したらしい。「採桑子」の直前に「西湖念語」と題する散文があつて、次のように記されているからである。なお、「念語」は、芝居が始まる前に行われる口上であり、ここでは「採桑子」のための序文の意味で使われている。

昔者王子猷之愛竹、造門不問於主人。陶淵明之臥輿、遇酒便留於道士。況西湖勝槩、擅東穎之佳名。雖美景良辰、固多於高會、而清風明月、幸屬於閑人。並遊或結於良朋、乘興有時而獨往。鳴蛙暫聽、安閑屬官而屬私。曲水臨流、自可一觴而一詠。至歡然而會意、亦傍若於無人。乃知偶來勝於特來。前言可信。所有雖非於己有、其得已多。因翻舊閱之辭、寫以新聲之調、敢陳薄伎、聊佐清歡。

むかし王子猷の竹を愛し、門に造りて主人を問わず(『晋書』卷八十「王徽之伝」)。陶淵明の輿に臥し、酒に遇えば便ち道士に留まる(『宋書』卷九十三「隱逸伝」)。況んや西湖の勝概、東穎の佳名を擅ままするをや。美景良辰は、固に高会に多しと雖も、而れども清風明月は、幸いに閑人に属す。並遊して或いは良朋に結び、興に乗じて時有りて独り往く。鳴蛙暫く聴き、安んぞ官に属すると私に属するとを問わんや(『晋書』卷四「惠帝紀」)。曲水流れに臨み、自のずから一觴して一詠す可し(『晋書』卷八十「王羲之伝」)。歡然として意に會うに至りては、亦た傍に人無きが若し。乃ち知る偶來は特來に勝ることを。前言は信ず可し。有る所は己れの有に非



ずと雖も、其の得ること已に多し。因りて旧闕の辞を翻し、写すに新声の調べを以つてし、敢えて薄伎を陳べて、聊か清飲を佐けん。

「旧闕の辞を翻し、写すに新声の調べを以つてし」というのは、かつて作つたふるい作品に手を入れ、それを新しいメロディに書き写したというのである。ところで『歐陽文忠公文集』によれば、かれが生涯の最後に作つた詩は、「絶句」（卷五十四 題下の原注に「臨薨の作」とある）と題する五言絶句であり、この詩のなかで「惟だ霜前の花有り、鮮鮮として高閣に対す」と詠ぜられているから、熙寧五年の閏七月のことであろう。しかし、「西湖」にかかわる作品について言えば、やはり熙寧五年に作られた「河陽の王宣徽に寄す」（卷五十七）と題する作品があつて、この中でつぎのように詠ぜられている。

況値湖園方首夏 況んや湖園 方に首夏に値い

正當櫻筍似三川 正に桜筍 三川に似たるに当たるをや

「首夏」とは、初夏四月である。また右の詩の直前に「初夏西湖」と題する詩がおかれている。この「西湖」および「河陽の王宣徽に寄す」詩における「湖園」の「湖」は、「採桑子」にうたわれている「西湖」と同じである。つまり歐陽修の「西湖念語」および「採桑子十首」は、はやくて熙寧四年七月からおそくて熙寧五年の初夏までの間に作られたと考えられ、したがって「採桑子十首」の制作時期は、邵雍の「三城の旧友衛比部に寄す」詩や曾鞏の「西湖二首・其の二」よりも早いことになる。ちなみに『歐陽修伝』（二六二および五九一頁）は熙寧四年とする。

#### 四 歐陽修「採桑子・其の三」と謝靈運「江中の孤嶼に登る」詩

「採桑子」の第三番目の作品に、次のように歌われている。

畫船載酒西湖好 西船に酒を載せ 西湖好し

急管繁絃 急管と繁絃と

玉盞催傳 玉盞 伝うるを催す

穩泛平波任醉眠 穩やかに平波に泛び 醉眠に任す

(以上、前関)

行雲却在行舟下 行雲 却つて行舟の下に在り

空水澄鮮 空と水は澄鮮す

俯仰流連 俯し仰ぎつつ流連す

疑是湖中別有天 疑ごうらくは是れ 湖中 別に天有らんかと

(以上、後関)

後関第四句の「湖中」は、この表記の裏に「壺中」の表記と意味をあわせもつ。「壺中天」という言葉で有名な、壺の中に別天地、つまり仙人の世界があるという話である。「神仙伝」(『太平広記』卷十二所収)。歐陽修は、「湖中」を「壺中」にひっかけて、いま自分があるこの「湖中」つまりこの地上こそ、仙人が住むという「壺中」つまり別天地、仙界ではないかと、しゃれたのである。

ところで右の作品において興味ぶかいのは、後関の第二句「空と水は澄鮮す」である。この一句が謝靈運(三八五〜四三三)の「江中の孤嶼に登る」(『文選』卷二十二)と題する詩を意識していることは、いたって明白である。「江中の孤嶼に登る」は、次のとおりである。

江南倦歴覽 江の南は歴覽するに倦み

江北曠周旋 江の北は周旋すること曠し

懷新道轉迴 新を懐いて 道は転た迴かに

尋異景不延 異を尋ねて 景は延びず

亂流趨正絕 流れを乱りて 正絶に趨けば

孤嶼媚中川 孤嶼は中川に媚ぶ

雲日相輝映 雲と日は相い輝映し

空水共澄鮮 空と水は共に澄鮮す

表靈物莫賞 靈を表せども 物の賞する莫く

繚眞誰爲傳 眞を繚めども 誰か爲に伝えん

想像崑山姿 想像す 崑山の姿

緬邈區中緣 緬邈たり 区中の縁

始信安期術 始めて信ず 安期の術

得盡養生年 養生の年を尽くすを得たるを

この詩は、謝靈運が西曆四二三年、三十九歳、永嘉郡（現在の浙江省温州市）の太守をしていたときの作品であり、詩題の「江中」は、永嘉江の中、「孤嶼」は永嘉江の中にあるひとつの島である。第一句は、永嘉江の南側は見飽きるほど尋ねまわった、第二句は、永嘉江の北側はまだ歩き回っていない、という意味。かくて「新を懐いて」永嘉江の北側をめざし、船に乗り込むのである。第五句の「乱」は、川の流れに対して直角にわたること、「正絶」は、川の中にあつて川の流れをせき止めるもの、つまり「孤嶼」である。

謝靈運が多くの人間を引き連れ、まるで探検家のように山の樹木を切り倒し、道のないところに道を切り開きながら、山登りを楽しんだのは、有名な話である。「宋書」卷六十七「謝靈運伝」。かれは山水の美に魅了されていた。

「江中の孤嶼に登る」詩においても、「孤嶼」をとりまく風景が、

雲と日は相い輝映し

空と水は共に澄鮮す

と、詠ぜられている。しかし、謝靈運は、山水の美にただ単に耽溺していただけではない。右の一聯に続いて、かれは

靈を表せども 物の賞する莫く

真を蘊めども 誰か為に伝えん

と、詠じた。「物」は自分外の人の意味であるが、「真」とは、一体いかなる意味であろうか。『説文解字』（八篇下）に、次のように説明されている。「真とは、僊（仙に同じ）人 形を変えて天に登るなり」、つまり道家でいう真人（悟りを開いた人）の真である。謝靈運がまるで何かに取りつかれたかのように、山登りに熱中したのは、この地上から隔絶した、人目にはつきにくいどこかに、きっと仙人がいる、と「真」つまり仙人を捜し求めていたからである。謝靈運当時の人にとって、仙界は人間世界とかけ離れた別世界であった。そして謝靈運は、

始めて信す 安期の術

養生の年を尽くすを得たるを

と、確かに仙界の存在を予感したのである。「安期」とは、安期生という名の仙人である。「列仙伝」（『芸文類聚』巻七十八「靈異部上 仙道」所収）。なお、拙論「陶淵明と謝靈運」を参照（『大谷女子大学紀要』第35号）。

ここで再び欧陽修の「空と水は澄鮮す」の一句である。謝靈運はなぜ、人跡未踏の山中にまで分け入らなければならなかったのか、と欧陽修は疑問を投げかけるのである。欧陽修が謝靈運の詩の一句「空と水は共に澄鮮す」から、「共」の一字を取りさって「空と水は澄鮮す」とうたったとき、かれは謝靈運のように何も辛苦して人跡未踏の山中

にまで捜し求めなくても、仙界はすぐ近くにあるではないか、と言いたかったのである。第一節に引用した曾鞏「西湖」詩の一句「何ぞ辛苦して人（天）外に求むるを須いんや」であり、「偶来は特来に勝る」、これは欧陽修「西湖念語」の一文である。また「採桑子」第二首の後闕および第八首の後闕に、それぞれ次のように歌われている。

蘭橈畫舸悠悠去 蘭橈 画舸 悠悠として去り

疑是神仙 疑ごうらくは是れ神仙ならんかと

返照波間 返照の波間

水闊風高揚管絃 水闊く 風高く 管絃を揚ぐ

風清月白偏直夜 風清く 月白く 偏に夜に直し

一片瓊田 一片の瓊田

誰羨驂鸞 誰か羨まん 鸞に驂るを

人在舟中便是仙 人 舟中に在り 便ち是れ仙なり

「蘭橈」と「画舸」は、要するに船のこと、「瓊田」は水面の比喩、「鸞」は、仙人が乗る鳥である。

### 五 清風 錢を用いず

拙論のテーマは、邵雍と欧陽修の影響関係である。すでに冒頭に述べたとおり、まったくの同時代人であるとはいえず、邵雍が欧陽修と親しく交際していた形跡はない。それは、両者の社会的立場の違いや、出身地が南北という地理的な違いによるであろう。南人と北人の仲が悪いことは有名である。邵雍の先祖は、范陽（現河北省涿県）の人で、

父親の邵古のときに共城（現河南省輝県）に移り住んだ。それに対して歐陽修は、吉州廬陵郡（現江西省吉安県）の人である。また邵雍の息子・邵伯陽の『邵氏聞見録』（卷十九）に、つぎのような逸話が伝えられている。「邵雍」治平の間、客と天津橋の上を散歩するに、杜鵑の声を聞き、慘然として樂しまず。客 其の故を問えば、則ち曰わく、洛陽 旧と杜鵑無し。今始めて至るは、主る所有るならん、と。客曰わく、何ぞや、と。康節先公（邵雍のこと）曰わく、二年ならずして、上 南士を用いて相と為し、多く南人を引いて、専務ら天下を變更し、此れ自り多事ならん、と。かくて王安石（一〇二一—一〇八六）が登場し、新法の施行という政治改革が行われるにいたつた、というのである。「熙寧の初に至り、其の言乃ち驗あり、異なるかな」。『邵氏聞見録』中の言葉である。王安石の本籍は、撫州臨川（現江西臨川県）であり、「かれの本籍が、唐時の江南西路、すなわち今の江西省のひとつであったことは、当時の文壇の指導者歐陽修（一〇〇七—一〇七二）からいって、同郷の後輩であつた<sup>12</sup>」。ただし、邵雍と歐陽修の關係について、やはり『邵氏聞見録』（卷二十）に、次のようなエピソードが記されている。

熙寧初、歐陽文忠公爲參知政事、遣其子棐叔弼來洛、省王宣徽夫人之疾。將行語叔弼曰、到洛唯可見邵先生、爲致吾嚮慕之意。康節先生既見叔弼、從容以語平生出處、以及學術大概。臨別猶曰、其無忘鄙野之人於異日。後十年、康節先公捐館。又十年、韓康公尹洛、請諡於朝。叔弼偶爲太常博士、次當諡議。叔弼嘗謂冕說之以道云、棐作邵先生諡議、皆往昔親聞於先生者。當時少年、一見、忻然延接、語以平生學術出處之大。故得其詳如此。豈非先生學道絕世、前知來物、預以告耶。蓋驗於二十年之後。異哉。

熙寧の初、歐陽文忠公（歐陽修）參知政事<sup>た</sup>爲り（歐陽修が參知政事となつたのは、実際には嘉祐六年（一〇五一）であつて、熙寧（一〇六八—一〇七七）の初ではない。胡柯『廬陵歐陽文忠公年譜』参照）、其の子・棐<sup>ひ</sup>（字は）叔弼<sup>しやくひつ</sup>をして洛に來たり、王宣徽（本名は王拱辰、字は君明、一〇二一—一〇八五。宣徽北使院に任せられたことがある。『宋史』卷三百一十八本伝。かれは邵雍とも親密な關係があつた<sup>13</sup>）夫人の疾を省せしむ。將に行かんとして叔弼に語りて曰

わく、洛に到らば唯だ邵先生を見、吾が為に嚮慕の意を致す可し、と。康節先生 既に叔弼を見、從容として以って平生の出處、および學術の大概を語る。別れに臨んで猶お曰わく、其れ鄙野の人を異日に忘るること無かれ、と。後十年にして、康節先公は捐館す。又た十年、韓康公（韓降の諡。一〇二二—一〇八八）洛に尹たりて、諡を朝に請う（韓降が洛陽の長官であったのは、元豊六年（一〇八三）。『宋史』卷三百一十五「韓降傳」。邵雍が康節の諡を賜つたのは、元祐（一〇八六—一〇九四）中。『同』卷四百二十七「邵雍傳」。『邵氏聞見録』の記述には、この部分にかぎらず、あいまいな点がときときある）。叔弼 偶たま太常博士為り、次いで（邵雍の）諡議に当たれり。叔弼 嘗て晁説之（字は）以道に謂いて云わく、棗 邵先生の諡議を作すは、皆な往昔親しく先生に聞きし者なり。当時少年にして、一見するに、（邵雍）忻然として延接し、語るに平生の學術出處の大を以つてす。故に其の詳を得ること此くの如し。豈に先生の學道は絶世にして、前に來物を知り、預め以つて告ぐるに非ずや、と。蓋し二十年の後に驗あり、異なるかな。

「驗あり、異なるかな」、先ほどの杜鵬のエピソードと同様、邵雍の予言者としての特異な一面を記したものであるが、歐陽修が息子の歐陽棗に対して、「洛に到らば唯だ邵先生を見、吾が為に嚮慕の意を致す可し」と言つたかどうかは別にして、邵雍と歐陽修との關係を求めるならば、せいぜいこの程度のものである。しかもこの文からはむしろ、邵伯陽の意圖とは逆に、歐陽修が当時いかに大きな影響力をもっていたかが、浮かびあがってくると言うべきである。周知のとおり、歐陽修は当時の政界および文學界の大立者である。今風にいえば、ニューリーダー。歐陽修の「各方面にわたるその才能のひろさは、さいごには宰相となつたという政治家としての地位の高さと相まって、文明全たいの指導者として、最高の地位にたち、もつとも影響力をもつ地位にいた」。吉川幸次郎著『宋詩概説』七八頁（中国詩人選集第二集一 岩波書店 昭和三十七年）。ただ、邵伯陽のために弁護すれば、歐陽修の子息にしても、自分の父親に対する回想録「事迹」（『歐陽文忠公文集』「付録」卷五）の中では、歐陽修をほめたたえた記事ばかりで埋めつく

ところで邵雍が歐陽修と直接的なかわりはなかったとしても、すでに拙著『夕日と芳草』二四二頁に指摘しておいたとおり、邵雍は歐陽修の文学をたかく評価し、愛読していた。「首尾吟・其の二二四」(卷二十)。

既貪李杜精神好 既に貪る 李杜の精神の好きを

又愛歐王格韻奇 又た愛す 歐王の格韻の奇なるを

「李杜」が李白と杜甫を指すのに対して、「歐王」は歐陽修と王安石を指す<sup>(14)</sup>。邵雍は「李杜」に対して、「精神好し」と表現した。この「精神好し」とは、一体、いかなる意味であろうか。かれの詩には「堯夫は是れ詩を吟ずるを愛するに非ず、老いたりと雖も精神の未だ耗せざる時」(「首尾吟・其の九」)のごとく、肉体的に健康であるという意味で「精神」という言葉が使われたり、「雨後 静かに観る 山の意思、風前 閑かに看る 月の精神」(「安樂窩中酒一樽」卷九)や、「花の妙は精神に在り、精神は人の造る莫し」(「善賞花吟」卷十二)などのごとく、心という意味で使われたりすることがあり、これらの用法は、邵雍にかぎらない、ごく常識的なものである。邵雍にとって特徴的なのは、六十五歳のときに作られた「人貴有精神吟」(卷十五)と題する作品である。

人貴有精神 人は精神有るを貴ぶも

精神多不醇 精神 多くは醇ならず

有精神而醇 精神有りて醇なるは

爲第一等人 第一等の人為り

不醇無義理 醇ならずして義理無ければ

是非隨怒喜 是と非は 怒と喜に隨う



怒以是爲非 怒るは是を以つて非と為せばなり

喜以非爲是 喜ぶは非を以つて是と為せばなり

怒是善人疎 是を怒れば 善人は疎んじ

喜非小人比 非を喜べば 小人は比す

敗國與亡家と 敗國と亡家と

鮮有不由此 此れに由らざる有ること鮮しすくな

娶妻娶柔和 妻を娶るは柔和を娶り

嫁夫嫁才美 夫に嫁ぐは才美に嫁ぐ

安得正婦人 安んぞ正しき婦人を得て

作配眞男子 眞の男子に作配せん

この詩は「国家」の存亡とふかく関わるものとして、「精神」の「醇」の重要性を説いた作品のようであるが、問題は、「精神有りて醇なるは、第一等の人為り」である。この「第一等の人」について、邵雍はさらに熙寧十年（一〇七七）、六十七歳のときに作った、「一等吟」（卷十九）と題する詩において、つぎのように詠じている。

欲出第一等言 第一等の言を出ださんと欲さば

須有第一等意 須らく第一等の意を有すべし

欲爲第一等人 第一等の人為らんと欲さば

須作第一等事 須らく第一等の事を作すべし

邵雍が「李杜」に対して、「精神好し」と表現したとき、「一等吟」にうたわれている内容に連なる意味で「精神」を使っているであろう。「李杜」は、「第一等の事を作」した「第一等の人」。邵雍は「李杜」を詩界の第一人者と考

えて、「精神好し」と表現した。邵雍の詩において、人物に対する評価を表す表現としての「精神好し」は、「李杜」に対するこの一句のみであるが、「精神好し」という表現は、もう一例ある。

花逢皓月精神好 花は皓月に逢いて 精神好く

月見奇花光彩舒 月は奇花を見て 光彩舒ぶ

「花月吟」(卷六)と題する詩の一聯である。この詩の場合の「精神好し」が、もし「李杜の精神好し」と関連して表現されたとするならば、「花は皓月に逢いて 精神好し」は、「花」(自然)の「第一等」を意味することになり、「精神好し」は、人物に対する評価(第一等の人)にのみ使われるわけではないことになる。かれは、「李杜」に対して、なぜあえて「精神好し」と表現したのであるうか。別のいい方をすれば、邵雍はなぜ「李杜」を「第一等」の詩人と、たかく評価したのであるうか。邵雍がもつとも敬愛していたのは、陶淵明である。「年来 疾を得て 詩狂と号す。毎度 詩狂 必ず觴を命ず。道を楽しんで 襟懷 檢束を忘れ、真に任せて 言語 思量を省く。賓朋は款密にして過徒久しく、雲水は優閑にして興味長し。始めて信ず 淵明 深意在りて、北窓 当日 羲皇に比せしこと」を。これは、かれの「後園即事三首・其の三」(卷五)である。ところで歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」(卷一百二十九「筆説」)に、つぎのように記されている。

落日欲没岷山西、倒着接籬花下迷、襄陽小兒齊拍手、大家爭唱白銅鞮、是常言也。至於清風明月不用一錢買、玉山自倒非人推、然後見其橫放。其所以警動千古者、固不在此也。杜甫於白、得其一節、而精強過之、至於天才自放、非杜甫可至也。

「落日 没せんと欲す 岷山の西、接籬を倒着して花下に迷う、襄陽の小兒 斉しく手を拍ち、大家 争いて 唱う 白銅鞮」、是れは常言なり。「清風 明月 一錢の買うを用いず、玉山 自のずから倒れ 人の推すに非ず」(ともに李白「襄陽歌」)に至りて、然る後に其の横放なるを見る。其の千古を警動する所以の者は、固に此

ここに在らずや。杜甫の白に於ける、其の一節を得、而して精強は之れに過ぐるも、天才にして自放なるに至りては、杜甫の到る可きに非ざるなり。

歐陽修が「李白杜甫詩優劣説」を記述した背景には、かれの意識のなかに「李杜」はもつとも優れた詩人である、という認識が動いているが（この文によるかぎり、歐陽修は李白の方をたかく評価している）、注意すべきは、この文における「精強」という評語である。邵雍が「歐王の格韻」と対にして、「李杜の精神」と表現したとき、歐陽修の「李杜」に対する評語である「精強」（精神の強弱さ）を意識していたのではあるまいか。歐陽修の「李杜」に対する評価とともに、「精強」なる言葉は、邵雍の「李杜」に対する評価である「精神好し」という表現を根拠づけてくれたのである。

以上が、邵雍は歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」を知っていたのではないか、と考える第一の理由である。なお、歐陽修自身は、「李杜」に対して、「李杜豪放の格」と表現したことがある（卷二百二十八「詩話」）。

## 六 清風 銭を用いず

歐陽修は「李白杜甫詩優劣説」において、李白の「清風 明月 一銭の買うを用いず、玉山 自のずから倒れ 人の推すに非ず」に対して、「其の千古を警動する所以の者は、固に此に在らずや」といつて、「清風 明月 一銭の買うを用いず」の句がもつ奇拔さを指摘したが、かれ自身も慶曆七年（一〇四七）四十一歳、滁州にいたとき、「滄浪亭」<sup>(16)</sup>（卷三 慶曆七年一〇四七の作）と題する詩を作り、つぎのように詠じた。

子美寄我滄浪吟 子美 我れに寄す 滄浪吟

邀我共作滄浪篇 我れを邀えて共に作る 滄浪篇

滄浪有景不可到

滄浪 景有るも 到る可からず

使我東望心悠然

我れをして東望して心悠然たらしむ

荒灣野水氣象古

荒灣 野水 氣象古び

高林翠阜相回環

高林 翠阜 相い回環す

新篁抽笋添夏影

新篁 笋を抽いて夏影に添え

老枿亂發爭春妍

老枿 亂れ發して春妍を争う

水禽閑暇事高格

水禽 閑暇 高格を事とし

山鳥日夕相啾噓

山鳥 日夕 相い啾噓す

不知此地幾興廢

知らず 此の地 幾たびか興廢する

仰視喬木皆蒼煙

仰いで喬木を視れば 皆な蒼煙なり

堪嗟人跡到不遠

嗟くに堪えたり 人跡 到ること遠からざるに

雖有來路曾無緣

來路有りと雖も 曾て縁無きことを

窮奇極怪誰似子

奇を窮め怪を極むる 誰か子に似たる

搜索幽隱探神仙

幽隱を搜索して 神仙を探る

初尋一徑入蒙密

初めて一徑を尋ねて 蒙密に入り

豁目異境無窮邊

豁目す 異境 無窮邊

風高月白最宜夜

風高く 月白く 最も夜に宜しく

一片瑩淨鋪瓊田

一片の瑩淨 瓊田に鋪く

清光不辨水與月

清光 弁せず 水と月と

但見空碧涵漪漣 但だ見る 空碧 漪漣に涵るを

清風明月本無價 清風 明月 本と無価なり

可惜祇賣四萬錢 惜しむ可きは祇だ売ること四万錢なるを

又疑此境天乞與 又た疑う 此の境 天の乞与し

壯士憔悴天應憐 壯士 憔悴して 天の応に憐むべきかと

鷗夷古亦有獨往 鷗夷 古に亦た独往する有り

江湖波濤渺翻天 江湖の波濤 渺として天に翻る

崎嶇世路欲脫去 崎嶇たる世路 脱去せんと欲し

反以身試蛟龍淵 反って身を以つて蛟龍の淵を試みる

豈如扁舟任漂兀 豈に如かんや 扁舟 漂兀に任せ

紅渠淥浪搖醉眠 紅渠 淥浪 揺られて醉眠するに

丈夫身在豈長棄 丈夫 身在り 豈に長棄せんや

新詩美酒聊窮年 新詩 美酒 聊か年を窮めん

雖然不許俗客到 雖然 俗客の到るを許さずと雖然も

莫惜佳句人間傳 佳句の人間に伝わるを惜しむこと莫かれ

全詩を引用したが、問題は「清風 明月 本と無価なり」の一句である。この句が李白「襄陽歌」の「清風 明月

一錢の買うを用いず」の単純なヴァリエーションであることは、いたって明白である。陳衍(二八五六―一九三七)

は「清風明月」の二句、更に一詩料なり」と評した(『宋詩精華録』卷二)。更に歐陽修の「河陽の王宣徽に寄す」(卷

五十七 熙寧五年一〇七二の作)と題する詩に至っては、

肥魚美酒偏宜老 肥魚 美酒 偏に老いに宜しく

明月清風不用錢 明月 清風 錢を用いず

のごとく、歐陽修は、「千古を警動する所以の者」とたかく評價した李白の句を、ほとんどそのままの形で用いているほどである。それに対して邵雍も、「有客吟」(巻四 嘉祐七年 一〇六二の作)と題する詩において、つぎのように詠じた。

伊嵩有客欲無言 伊嵩に客有り 言無からんと欲す

進退由來盡俟天 進退 由來 尽く天に俟つ

好靜未能忘水石 靜を好むも 未だ水石を忘るる能わず

樂閑非爲學神仙 閑を樂しむは 神仙を學ぶが爲に非ず

休嗟紫陌難爲客 嗟くを休めん 紫陌に客と爲り難きを

且喜清風不用錢 且くは喜ぶ 清風 錢を用いざるを

枉尺直尋何必較 枉尺直尋 何ぞ必ずしも較わんや

此心都大不求金 此の心 都大より金きを求めず (「都大」の訓「詩詞曲語」  
「薛稷」(巻二)による)

「清風 錢を用いざる」、「この一句には「明月」の語はないけれども、また「既に貪る 李杜の精神の好きを」や、「文章 高く摘む 漢唐の艶、騷雅 濃かに薫る 李杜の香」(韻に依りて王安之小卿の六老詩に和す、仍お率い見れて七と成る七首・其の四「卷十三」などと詠じているとおり、邵雍は李白の愛読者であつたけれども、かれは歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」に触発されて、「清風 錢を用いざる」と表現したのではあるまいか。邵雍と「月」「風」といえば、かれの五言絶句「清夜吟」(巻十二、熙寧七年一〇七四の作)の「月 天心に到る處、風 水面に來たる時。一般の清味の味、料り得たり 人の知ること少なるを」や、五言律詩「晚步吟」(巻十二、熙寧七年一〇七四の作)の後半四句

「月 松梢に出づる処、風 蘋末に来たる時。林間 此の光景、能く幾人か知るもの有らん」など、形而上的なふかい思想性をもった作品が連想されるからである。

日日步家園 日日 家園を歩み

清風不着錢 清風 錢を着もちいず

これは、邵雍の「韻に依りて田大卿に贈らるるに和す」(卷七 熙寧三年一〇七〇の作)と題する詩の冒頭の一聯である。「清夜吟」や「晚步吟」と比較するとき、「清風 錢を着いず」、あるいは先ほどの「清風 錢を用いざるを」は、あまりにも卑俗にすぎるのであるまいか。

以上が、邵雍は歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」を知っていたのではないかと考える第二の理由である。ただ、遺憾ながら歐陽修の「李白杜甫詩優劣説」がいつ書かれたのか、わからないのだが。なお、邵雍は「歐王」に対して、「格韻の奇」と表現したが、「格韻」といえば、蘇軾のつぎの文が思い浮かぶ。「魯直の詩文は、蝻しょうぼう（蟹の一種）・江瑤柱（貝柱の一種）の如し。格韻高絶なれば、盤飧ばんしん尽く廢す。然れども多く食うべからず、多く食えば則ち風を發して氣を動かす」(「黄魯直の詩の後に書す二首・其二」『蘇軾文集』卷六十七)。邵雍がいう「格韻」と蘇軾の「格韻」との間に、直接的な関係はないであろう。むしろ歐陽修の『詩話』である。歐陽修は『詩話』のなかで、先ほど引用した「李杜豪放の格」とか、「其の(唐の鄭谷をさす)詩は極めて意思有り、亦た佳句多し。但だ其の格は甚だしくは高からず」のごとく、「格」という言葉を、詩を評価する基準の一つにしている。「格韻の奇」と何か関係があるのではないだろうか。

## 七 二人の清歛

つぎに「清歛」という言葉をめぐる、邵雍と歐陽修の関係を考えてみたい。すでに引用したとおり、邵雍は「三城の旧友衛比部に寄す」詩において、

処処 是れ清歛なり

と詠じた。「清歛」という言葉は、手近かにある辞書の類によるかぎり、必ずしもポピュラーとはいえないようだが、歐陽修の「西湖念語」の最後の一文にも、

敢えて薄伎を陳べて、聊か清歛を佐けん

と使われていた。邵雍がうたい、歐陽修がつかった「清歛」とは、一体どのようなニュアンスをもった言葉なのであろうか。

まず欧陽修の場合。後蜀・趙崇祚編『花間集』をひもとくと、「旧歛」という言葉が比較的ひんばんに使われている。たとえば韋莊（八三六―九一〇）の「婦国遠三首・其二」（卷三）の後関に、「別後 只だ知る 相い愧ずるを。淚珠 遠く寄せ難し。羅幕 繡幃 鴛被。旧歛 夢裏の如し」。この詞における「歛」は、男女の間のよるこびである。欧陽修がつかう「清歛」という言葉には、この種の「旧歛」が連想されて、妓女をとまなう宴席における艶なものを表現する言葉であるらしい。これは、欧陽修の創見ではない。かれより先輩である聶冠卿（九八八―一〇四二）に「多麗」と題する詞があり、その前関につきぎのようにうたわれている（句読は、万樹『詞律』卷二十による）。

想人生

想う 人生

美景良辰堪惜

美景良辰は惜しむに堪えたり



問其間 賞心樂事

其の間を問えば 賞心と樂事は

就中難是并得

就中 是れ并びに得ること難し

況東城 鳳臺沁苑

況んや東城 鳳台の沁苑

泛晴波 殘照金碧

晴波に泛かぶ 殘照金碧なるをや

露洗華桐

露は華桐を洗い

煙霏絲柳

煙は糸柳に霏たり

綠陰搖曳

綠陰は揺曳し

蕩春一色

蕩春は一色なり

畫堂迥 玉簪瓊佩

畫堂迥かなり 玉簪と瓊佩と

高會盡詞客

高會 尽く詞客なり

清歡久 重然絳蠟

清歡久しく 重ねて絳蠟を然やし

別就瑤席

別に瑤席に就く

この詞は、宋・吳曾の『能改齋漫錄』（卷十六「梁府」）に引用されているのだが、『能改齋漫錄』の記述するところでは、右の詞は、李良定公（李端懿のこと）の宴席で作られた。聶冠卿の「多麗」の正確な制作時期はわからないが、歐陽修は、熙寧四年（一〇七二）（？）に「西湖念語」を書くにさいして、聶冠卿（九八八―一〇四二）の「多麗」詞を参考にしたにちがいない。それは、ふたつの面から考えられる。ひとつは、「西湖念語」に「清歡」という言葉が使用されているのみならず、さらに「美景良辰は、固に高會に多しと雖も」と表現されているごとく、「美景良辰」および「高會」も、「多麗」詞中の言葉であること。もうひとつは、先ほどの『能改齋漫錄』のつぎに引用する記述である。

蔡君謨時知泉州、寄定公書云、新傳多麗詞、述宴遊之娛、使病夫舉頭增歎耳。又近者有客至自京師、言諸公春日多會於元伯園池、因念昔遊、輒形篇詠、緣渠春水走潺湲、畫閣峯巒映碧鮮。酒令已行金盞側、樂聲初認翠裙圓。清遊盛事傳都下、多麗新詞到海邊。曾是尊前沈醉客、天涯迴首重依然。

蔡君謨（蔡襄の字）時に泉州に知たり、（良）定公に書を寄せて云えらく、新たに多麗詞を伝えて、宴遊の娛しみを述べれば、病夫をして頭を挙げて歎きを増さしむるのみ。又た近ごろ客の京師自り至る有りて、諸公の春日に多く元伯（李端懿の字）の園池に会すと言ふ、因りて昔遊を念ひ、輒ち篇詠を形す。渠に縁う春水 走りて潺湲、画閣 峰巒 映じて碧鮮。酒令 已に行わる 金盞の側、樂声 初めて認む 翠裙の円。清遊の盛事 都下に伝わり、多麗の新詞 海辺に到る。曾て是れ尊前に沈酔するの客、天涯に迴首して重ねて依然たり。

蔡襄（一〇二一—一〇六七）が泉州の知事であったのは、歐陽修の「端明殿學士蔡公墓誌銘」（卷三十五）によれば、至和三年（一〇五六）から嘉祐五年（一〇六〇）。蔡襄は、「四賢一不肖詩」（「宋史」卷三百二十本伝）「四賢」は、范仲淹、余靖、尹洙および歐陽修。「一不肖」は、高若輩、で知られるように、歐陽修ときわめて親密な間柄であった。歐陽修が「西湖念語」を書いたのは、すでに述べたとおり、大まかにいえば熙寧四年（一〇七二）七月から熙寧五年の初夏の間と推定される。かれは『能改齋漫錄』に記述されている聶冠卿の「多麗」詞を知っていたであろう。「西湖念語」における「清飲」という言葉は、「多麗」詞にヒントを得たのではあるまいか。

つぎに邵雍の場合。嘉祐六年（一〇六二）に作られた「名利吟」（卷三）に、つぎのように詠ぜられている。

名利到頭非樂事 名利は到頭 樂事に非ず

風波終久少安流 風波は終に久しうして 安流少れなり

稍隣美譽無多取 稍や美譽に隣すれども 多く取る無かれ

纔近清歡與賸求 纔かに清歡に近づけば 与に賸く求めん

美譽既多須有患 美譽 既に多ければ 須らく患い有るべし

清歛雖賸且無憂 清歛 賸しと雖も 且つ憂い無し

滔滔天下嘗知否 滔滔たる天下 嘗て知るや否や

覆轍相尋卒未休 覆轍 相い尋いで 卒に未だ休まず

第七句の「滔滔たる天下」は、隱者の傑溺が孔子の弟子・子路に対していった言葉「滔滔たる者は天下皆な是れなり。而うして誰か以つて之れを易えん。且つ而其の人を辟くるの士に従う与りは、豈に世を辟くるの士に従うに若かんや」(『論語』第十六「微子」篇)。この第七句は、第二句の「風波は終に久しうして 安流少れなり」と内容的に呼応し、諸國を周流して政治の理想を説いてまわった孔子の生き方に対する批判である。邵雍は生涯、孔子を尊崇していたが(予れは仲尼を知る者に非ず、学んで仲尼と為らんとする者なり)『皇極經世書』卷五「觀物内篇五」、右の詩においては、孔子に対して「名利」を求めめる人物として批判しているのである。ところで右の詩において「清歛」が、「美譽」(社会的ほまれ)と対にして使用されていることを考えれば、邵雍のいう「清歛」は、社会的ほまれや「名利」(名譽と利益)をこえた、心的次元における「無憂」の歛びを意味するであろう。また、嘉祐七年(一〇六二)に作られた「閑居述事十六首・其の五」(卷四)

清歛少有虛三日 清歛 三日を虚しくする有ること少れなり

劇歛未嘗過五分 劇歛 未だ嘗て五分より過ぎず

相見心中無別事 心中を相い見て 別事無く

不評興廢則論文 興廢を評せずんば 則ち文を論ず

における「清歛」も、「名利吟」における「清歛」と基本におなじ意味と考えてよい。このようにおなじく「清歛」といっても、歐陽修と邵雍との間には、上述したような違いがあるのである。

ところで右に引用した邵雍のふたつの詩が作られた時期は、歐陽修の「西湖念語」より早い。しかし、つぎのふたつの点に注意しておかなければならない。ひとつは、邵雍が右のふたつの詩を作ったとき、かれはまだ地上の仙界を見出してはいなかったことである（『夕日と芳草』第三編 第一章 邵雍と芳草参照）。かれが地上の仙界をみつめて、「処処 是れ清歡なり」（熙寧五年秋）と詠じたとき、すでに歐陽修は「疑ごうらくは是れ 湖中 別に天有らんかと」（おそくとも熙寧五年初夏、はやければ熙寧四年七月）と、「湖中の別天地」をみつめていた。もうひとつは、ただ単に「清歡」使用時期の先後を問題にするならば、歐陽修は、すでに明道元年（一〇三二）に「双桂楼」（卷五十六）と題する詩を、また嘉祐四年（一〇五九）には「王君玉（王琪の字）の中秋の席上に月を待ちて雨に値うに酬ゆ」（卷五十七）と題する詩を作り、それぞれ次のように詠じている。

嘉樹叢生秀 嘉樹 叢生して秀で

茲樓層漢傍 茲の楼 漢の傍に層る

飛甍臨萬井 飛甍 万井に臨み

伏檻出垂楊 伏檻 垂楊を出づ

卷幕晴雲度 幕を卷けば 晴雲度り

披襟夕籟涼 襟を披けば 夕籟涼し

山河瞻帝里 山河 帝里を瞻み

風月坐胡牀 風月 胡牀に坐す

愛客東阿宴 愛客 東阿の宴

清歡北海觴 清歡 北海の觴

淮南多雅詠 淮南（直接的には淮南王作「桂樹叢生秀」の二句で始まる「招隱上」を指す） 雅詠多ければ

歳晚翫幽芳 歳晚 幽芳を翫ばん

池上雖然無皓魄 池上 皓魄無しと雖然も

樽前殊未減清歡 樽前 殊に未だ清歡を減ぜず

緑醅自有寒中力 緑醅りよくば 自のすから寒中の力有り

紅粉尤宜燭下看 紅粉 尤も宜し 燭下に看るに

羅綺塵隨歌扇動 羅綺の塵は歌扇に隨いて動き

管絃聲雜雨荷乾 管絃の聲は雨荷に雜りて乾なり

客舟閑臥王夫子 客舟に閑臥す 王夫子かうし

詩陣教誰主將壇 詩陣 誰をして主將の壇とならしむる

前詩における「清歡 北海の觴」の「北海」は、北海（青州）の太守・唐の李邕のことで、この一句は、杜甫の「李北海に陪して、歴下亭に宴す」詩（分門集註杜工部詩「卷五」）をふまえた表現である。

「李北海に陪して、歴下亭に宴す」詩（分門集註杜工部詩「卷五」）をふまえた表現である。くりかえしになるが、歐陽修が「清歡」と表現するとき、「清歡 北海の觴」といい、「樽前 殊に未だ清歡を減ぜず」というごとく、それはやはり、酒と妓女をともなう宴席の場、いわば形而下的なものであった。それに対して邵雍の場合は、「纔かに清歡に近づけば 与に賸く求めん」といい、「清歡 三日を虚しくする有ること少れなり」という、きわめて観念的で、邵雍の生き方に共感できる人間でなければ、必ずしも理解しやすいとはいえない、形而上的なニュアンスをもつものであった。④ 両者が使用する「清歡」には、もともと内容的にこういう違いがあることは否定できず、歐陽修の「清歡」と邵雍の「清歡」とは、まったく無縁のように見える。また邵雍は、『全宋詞』（唐圭璋編 中華書局 一九六五年）によれば、詞を一首も作っていない。けれども、第二節に引用した「擊壤吟」に、「長年

国裏 花は千樹、安楽窩中 楽は満ち懸る。楽有り花有り 仍お酒有り、却つて疑う 身は是れ洞中の仙なるかと」と、詠ぜられていた。この詩にいう「楽」（音楽）は、すでに述べたとおり、市井の笙歌つまり詞の類であろう。欧陽修の「採桑子」に「画船に酒を載せ 西湖好し、急管と繁絃と。玉盞 伝うるを催す、穏やかに平波に泛かび 醉眼に任す」と、うたわれていた。「又た愛す 欧王の格韻の奇なるを」と詠じて欧陽修の詩を愛読し、また「楽」と「洞中の仙」を詠じた邵雍は、欧陽修の「西湖念語」を読み、「採桑子」をも愛唱していたのではあるまいか。ついでに言えば、かれは「能く帰るは陶元亮に謝<sup>は</sup>せず、善く聴くは何ぞ鍾子期に慙<sup>は</sup>じん」（「首尾吟・其の六十三」卷二十一）、あるいは「何れの処の青楼か桃李を隔て、楽声 時に復た天津に到る」（「天津聞楽吟」卷十五）と詠じている。鍾子期が琴の名鑑賞家であったことは、よく知られている。「青楼」は妓楼である。

民間の大学者・邵雍は、おのれの世界観にしたがって、たしかに、独自に地上の仙界を見つけて楽しんで来た。しかし、当時の文化状況ぜんたいに目を向けると、邵雍はけっして孤立していたのではなく、じつは政界文学界の大立者・欧陽修の「敢えて薄伎を陳べて、聊か清飲を佐けん」の影響をうけ、刺激されて、「処処 是れ清飲なり」と、あたかも欧陽修の向こうを張るかのごとく、己れの「清飲」を楽しみ歌っていたのではないか、別のいい方をすれば、邵雍が地上の仙界という「悟りの境地」に至るにあたって、欧陽修の思想が影響を与え、最終的に後押しをして、「悟りの境地」にまで押しあげたのではないかと、わたしは考えるのである。<sup>④</sup>

#### 注釈

- (1) 「大阪芸術大学 紀要〈藝術〉13」（一九九〇年十二月）。
- (2) 拙著「夕日と芳草——中国古典文学論集——」所収（現代図書 一九九九年）。
- (3) 「夕日と芳草」二五三頁。
- (4) 守屋美都雄 訳注 布目潮風 補訂「荆楚歳時記」（平凡社 東洋文庫324一八七―一八八頁参照）。

- (5) この作品の制作時期について、清水茂氏は「いつの作か不明。政治を批判する態度からいって、神宗皇帝によって任用された熙寧元年（一〇六八）以前の作であろう」といわれた。清水茂注『王安石』四四頁（中国詩人選集二集4 岩波書店 昭和三十七年）。
- (6) 拙稿「陶淵明『桃花源并記』その後」二〇頁。
- (7) 寛文生注『梅堯臣』「解説」八頁（中国詩人選集二集3 岩波書店 昭和三十七年）。
- (8) この詩の制作時期は、朱東潤編年校注『梅堯臣編年校注』によれば明道二年（一〇三三年）である。
- (9) 拙稿「陶淵明『桃花源并記』その後」二二頁。
- (10) 『夕日と芳草』一八四頁。
- (11) 千支の日付は、方詩銘「方小芬編著『中国史歴日中西歴日对照表』（上海辞書出版社 一九八七年）による。
- (12) 清水茂注『王安石』「解説」一三三頁。
- (13) 南宋の朱弁（？）『曲洎旧聞』（卷二）には、「歐陽公 政府に在りしとき、康節の名を聞くも、而れども未だ之れを識らざるなり」と記されている。
- (14) 趙齊平「不畏浮雲遮望眼——說王安石《登飛來峰》」参照。『宋詩憶說』所収一一五頁（北京大學出版社 一九九三年）。
- (15) 蕭士贇も「分類補註李太白詩」卷七において、この歐陽修の一文を引用した。
- (16) 「滄浪亭」は、蘇舜欽（字は子美）が蘇州に建てたもので、かれに「滄浪亭」詩、「水調歌頭・滄浪亭」詞および「滄浪亭」文の諸作品がある。
- (17) 双桂樓は、錢惟演が洛陽の府第にたてた高樓。『邵氏聞見録』（卷八）。
- (18) 王琪の「中秋の席上に月を待ちて雨に値う」詩は、残っていないようだ。『全宋詩』（卷一八七）。

## 補注

- ① 王拱辰は邵雍の熱烈なファンの一ひとりであって、かれは邵雍のために屋敷を斡旋しているほどである。邵雍「天津の新居成り、府尹の王君脱尚書に謝す」詩（卷四 嘉祐七年一〇六二）参照。また王拱辰は「堯夫先生の安樂窩中好打乖吟に和す」（卷九所収 熙寧六年一〇七三）のとき富弼、司馬光、王尚恭、任遠、程顥、呂希哲（公著の子）たちが唱和していると題する詩を作り、つぎのように詠じている。「安樂窩中 名は隱君、絳箚を腹藏し 多間に富む。一廬の水竹 生計を為

し、三徑の癡 世紛に混じる。婉画（漢の張良のこと）旧と嘗て幕府を辞し、少微（処士にあたる星）今ま已に星文に應ず。心に了るは便ち是れ棲真の地、何ぞ必ずしも煙霞 白雲に臥さんや。邵雍は「思山吟」二首・其の二」（卷六 熙寧二年一〇六九）において、「祇だ恐る 身は閑かにして心は未だ閑かならざるを、心閑かなれば 何ぞ必ずしも白雲に臥さんや」と詠じた。王拱辰は邵雍のよき理解者でもあった。なお、邵雍は王拱辰の詩の一句「少微 今ま已に星文に應ず」を取って、「君脱宣徽の『少微 今ま已に星文に應ず』を用いるに謝す」（卷十一 熙寧七年一〇七四）と題して詩を作り、「二字 詩中 義 未だ分ならざるに、少微 今ま已に星文に應ずと。閑人 早くに是れ愚摠無きに、更に閑人の与に後門を開く」と詠じている。

② 歐陽脩の「滄浪亭」に、「奇を窮め怪を極むる 誰か子に似たる、幽隠を搜索して 神仙を探る」、あるいは「俗客の到るを許さずと雖然も、佳句の人間に伝わるを惜しむこと莫かれ」と歌われているとおり、歐陽脩もこの詩を作ったとき、つまり慶曆七年（一〇四七 四十一歳）の時点では、「桃花源」を別世界と、考えていたようだ。

③ 『漢語大詞典』に邵雍の「名利吟」中の「清飲」とともに、かれより古い用例として、唐・馮贄著『雲仙雜記』（卷三）「少延清飲」の次の文が引かれている。「陶淵明得太守送酒、多以春醪水雜投之、曰、少延清飲數日」。そしてこの一文は、『淵明別伝』なる書物によると注記がある。ただし、『雲仙雜記』の編者は、「自序に天福元年（九三六）に作る」と称し、而して序中に、天祐元年（九〇四）、故里に退婦し、書は四年の秋に成る。又た数歳にして始めて篇を終えるを得たり、と云い、年号の先後亦た顛倒し、其の後人の依託為ること、未だ詳考するに及ばずして明らかなり」、結局、「王錡の作る」ところ為ること疑いなし」（『四庫全書總目提要』卷一百四十「子部」五十一「小説家類」一）ということである。王錡は、南宋の紹興（一一三一～一一六二）の頃の人（『四庫全書總目提要』卷一百三十七「子部」四十七「類書類存目」一「補侍兒小名錄」一卷「參照」）。「淵明別伝」の作者は不明である。いずれにしても陶淵明がいう「清飲」は、飲酒がもたらす幸福な状態をいうようであり、「清飲」なる言葉は、陶淵明、歐陽脩、邵雍それぞれ己れの世界観に従って、至福というニュアンスをもって使用されている。

④ 辛棄疾（一一四〇～一一二〇七）は、絶筆といわれる「洞仙歌 丁卯八月病中作」（鄧廣銘 箋注『稼軒詞編年箋注 增訂本』卷五 五六〇頁 上海古籍出版社）と題する詞の後闕において、「羨む 安樂窩中 泰和湯、更え劇飲するとも過ぎる無く、半醺なるのみ」とうたった。「安樂窩」は邵雍の屋敷の号、「泰和湯」は邵雍が命名した酒のこと（邵雍「無名公伝」）。「劇飲」の句は、本文に引用した邵雍の「閑居述事六首・其の五」の一句「劇飲 未だ嘗て五分より過ぎず」にもとづく表



現である。辛棄疾は金との徹底抗戦の主張を、生涯貫きとおした気骨のある愛國詞人である。そのようなかれが辭世の詞において、まったくちがった生き方をした邵雍に対して、「羨む」とうたっているのである。辛棄疾の胸中を思えば、人をして憮然たらしむものがあると、いわなければならぬ。辛棄疾の心のなかにおのれの生き方に対する後悔はなかったとしても、本人の意志とはまったく無関係な時勢が、個人にもたらす悲運を考えれば、あまりにも不合理な、と思わずにはいられない。

## ⑤

本論の冒頭に引用した曾鞏の詩句「自のずから仙郷の水郷に在る有り」が、欧陽修の「探桑子」の一句「疑ごうらくは是れ湖中 別に天有らんかと」の影響を受けていることは、おそらく間違いない。以下にその理由を記しておく。

その一、曾鞏は、科挙を通じて欧陽修と師弟の関係にある。

その二、曾鞏に「致仕せる欧陽少師に寄す」(巻六)と題する、退職して潁州で暮らしていた欧陽修に送った詩があり、この中でつぎのように詠じている。「金を揮って故老を延き、駅を置いて嘉賓を候つ。西湖の月を主当し、潁水の春を勾留す」。曾鞏は退職後の欧陽修の生活に対しても、ふかい関心をいだいていた。

その三、曾鞏、欧陽修ともに「西湖」という名の湖を詠じている。

その四、曾鞏の作品は、欧陽修の作品の翌年に作られ、しかも曾鞏にこの詩以外におなじ内容を詠じた作品がない。

などである。ただし、詞についていえば、曾鞏は一首(その中の一首は存目のみ)しか伝わっていない(唐圭璋編『全宋詞』一九九頁 中華書局)、かれは詞の創作にあまり関心がなかったようである。なお、「清飲」という語は、曾鞏の「賈甫の元考を送らんとするに元考に至らずに和す」(巻五)と題する詩にも使われている。本文に「清飲」という言葉は、手近かにある辭書の類によるかぎり、必ずしもポピュラーとはいえないようだ」と記したが、資料をていねいに調べれば、まだ出てくるかもしれない。

